イヴァン・フランコの学校をめぐる短編群
――『鉛筆（*Оловець*）』（1879）その他

小粥　良

序

19 世紀末から第一次大戦中にかけて活躍したウクライナの作家イヴァン・フランコ（Іван Франко, 1856－1916）は、ウクライナ文学史上国民詩人としてタラス・シェフチェンコと並び称される存在である。様々な欧州語に堪能で、ジャーナリストとしてドイツ語やポーランド語の新聞への寄稿も行ってはいるが、その作品の大部分はウクライナ語によってなされた。[1] では、何故『独仏文学』の記事として取り上げようとしているのかというと、フランコとオーストリア帝国の繋がりの深さのゆえである。フランコが生きた時代、彼の文学活動が行われたガリチア地方はオーストリア帝国の一部であったのであり、この地域出身のザッハー・マゾッホ（Leopold Ritter von Sacher-Masoch, 1836－1895）やヨーゼフ・ロート（Joseph Roth, 1894－1939）などのドイツ語による文学作品に繰り返し描かれた土地である。そのようなオーストリア文学の理解を深めるために、ガリチアをめぐって被支配民の視点から非ドイツ語で書かれた文学テキストを検討することは、ここで取り上げる価値が充分にある研究テーマと思われる。

多少言い訳がましい理屈づけから始めたが、日本ではウクライナ文学研究は専らロシア文学研究者の領域となっていながら、実際には、あまり手が着けられていないような現状である。また、ロシア研究者はロシア中心の観点に縛られ、ウクライナ民族やウクライナ文化をロシアから独立した別個のものと認識することに躊躇いを感じているような印象を受ける。ロシア帝国の下でロシア化が進んだウクライナ東部には、確かにそのようなアイデンティティーの曖昧さがあるかもしれない。しかしガリチア、すなわち今日のウクライナ西部は、第二次大戦の勃発までロシアの支配下に入ったことがなく、むしろポーランドの支配の下にポーランド化の圧力に曝され続けた土地である。イヴァン・フランコが活躍した 19 世紀後半は、ガリチアでポーランド人の支配に対する抵抗の中からウクライナ民族運動が発展し、明確にウクライナ文学と呼べるものが出現し、[2] ウクライナ語の雑誌や新聞が増殖して大衆的な購読者層を見出した時代であった。そのような成果は、ウクライナ民族主義者（*народовці*）の地道な啓蒙運動（プロスヴィータ協会の活動など）の展開と手を携えて進展した、ガリチアにおける義務初等教育の普及および定着（つまりは、就学率・識字率の向上）を抜き

にしては語れない。[3] フランコが学校について取り上げた作品を書いているのも、そのような文脈において理解されなければならない。(これらの短編は、一見、学校教育を否定して、ウクライナの村落共同体の伝統的で牧歌的な暮らしをひたすら称揚しているかのようだが、それが真の意図ではない。) そして、このような進展はオーストリア帝国の統治下において起こったのである。このように、ロシア、ポーランド、オーストリアの狭間にあったウクライナの文化形成、アイデンティティー形成は紆余曲折を経ざるを得なかったのであるが、その辺りに、スラヴィストの側からだけではなくゲルマニストの側からもこのテーマにアプローチする余地があるように思う。

今回取り上げるのは、学校を舞台にした、あるいは学校教育に多少なりとも触れたフランコの短編群であり、とりわけ短編集『ガリチア素描(*Галицькі образки*)』(1885年) に所収の『鉛筆 (*Оловець*)』(1879) [4] であるが、やはり同じ短編集に収められた他の短編、『幼いミロン (*Малий Мирон*)』(1879 年) [5]、『フリーツの学校教育 (*Грицева шкільна наука*)』(1883) [6]、『ペン習字 (*Schönschreiben*)』[7] にも言及したい。

なお、オーストリア帝国時代のガリチア地方の多民族・多文化の複雑な構成については以前『独仏文学』に書いた[8]ので、ここではそれについての説明はなるべく簡略なものに留めたい。

I.『鉛筆』(1879)

まず、短編小説『鉛筆』(1879) のストーリーの概略を示そう。この小説を含む『ガリチア素描』所収の短編群は、よく「自伝的」と形容されるのであるが、『鉛筆』の舞台となったヤセニーツァ・シーリナ村はフランコの出身地ナフイェーヴィチー村と同じリヴィウ州ドロホービチ区にあり、彼は子供時代まさにこの短編の主人公と同じようにこの村の小学校で学んだ。主人公が (おそらく両親を亡くし) 親族の世話になっている状況も、フランコ自身の境遇に似ている。[9]

物語の冒頭はこうである。

> 私がこの物語をでっち上げただとか、あるいはまた、題名がなんらかの隠喩だなどとは考えないでいただきたい。いや、本当に鉛筆についての話であって、しかも完全なものではなく、まあ 3 ツァーリ[10]ぐらいの切れ端だ。だが、もし誰かが 3.5 ツァーリだったと言ったとしても、そいつを訴えたりするつもりもない。しかしながら、私がよくわかっているのは、それが 4 ツァーリには達しなかったということだ。それに関しては、法律の言い方を使えば、誓言したっていい。あるいは、我がヤセニーツァ村の住人たちの使う言い回しのように、「世界を支えているものを賞讃したり、嘆いたりする」ことだってできる。この物語の主人公は 3.5 ツァーリの長さで、それ以上ではなかった。

私たちが最後にお互いを見てから、つまり私がそれを見てから、多くの年月が過ぎた。だって、それがその鋭い尖端で、どうやって私を見ることができようか？とにかく、それはまる一日ともう半日の間、私の通学カバンの中で、本の下に、真っ暗闇の中に転がっていた！私が嘘をついているのでなければ、これは 16 年以上昔の話である——親友を忘れるのにさえ充分な時間だ。だが、私はそれを決して忘れなかった。あの鉛筆の切れ端を。長さ 3.5 ツァーリで、暗く赤い色の木でできていて、六面体で、黄色い塗料が塗られていて、削られていない方の端に Mittel という名前が銀色に刻印されていて、もう一方の端はいい具合に削られていた——ちょうど村の少年が必要としているぐらいの加減に。[11)]

少年がある冬の朝に校庭で雪の上に落ちている鉛筆を拾い、それをずっとカバンの中にしまっている。別に高級品とかいうのでもなく、使いかけの鉛筆の切れ端である。しかし、貧しいガリチアの農村の少年にとって、それは大変魅力的な輝きを放つ宝物であるかのようだ。ドイツ語で Mittel という銀色の文字（商標？）が施されている。どこか西の方、ウィーンとかリンツとか、帝国の中央部の工場で製造されたものであろうか。Mittel はもちろん「学習用具（Lernmittel）」を意味しているのだろうが、Mitteleuropa というような場合の Mittel- を想起させ、「中央」という響きを感じさせる。ウクライナ語の（すなわちキリル文字による）テキストの中で、このドイツ語の単語のラテン文字は浮き立って見える。彼はこの鉛筆を別に盗んだわけではなく、ただ拾ったのだ。しかし、彼はそれを秘密の宝物のようにカバンの底にしまっている。おそらく、それは貧しい家の子である彼には買ってもらえないような品物なのだろう。一見、何の罪も無いような他愛ない話と思える。しかし、これがとんでもない事件に繋がっていく。落とし物なら落とし主がいるはずであるが、主人公はそこまで考えはしないで、ただ、カバンの底の暗闇の中に転がっている鉛筆を思い、ずっと幸福な気持ちで学校にいるのだが、その幸福感はやがて授業中に、鉛筆の持ち主が級友のステパンであることが明らかになるとき、唐突に打ち破られることとなる。ステパンは鉛筆をなくしたことを教師に見咎められ、窮地に陥る。この教師の残忍さは常軌を逸していて、戦慄を覚えずにはいられないような体罰の描写が続く。あまりの恐怖に教室は静まりかえる。主人公の少年も、恐怖のあまり、カバンの中の鉛筆のことを言い出せずに、ステパンを見捨ててしまうこととなる。重い罪悪感を抱えながらも、彼は鉛筆をカバンに隠したまま帰宅し、様子がおかしいことを叔母に気づかれる——少年は両親を亡くして、親族の世話になっているようだ——が、「また喧嘩でもしてきたんだろう。」と言われ、「この役立たず！」と罵られる。（これは単に田舎の人の普通の話ぶりということで、根は善良な女性であることは少年にもよくわかっている。）少年は黙ったまま夕食を取り、食べ終わった後は本を手に取るが、同じ箇所を何度読み返しても、言葉の意味が頭に入ってこない。どんなに忘れようとしても、今日の出来事が、そし

てステパンの顔が頭から離れない。やがて床に就くが、夜通し悪夢（その中には、背中にMittelという模様のあるトカゲが現れる）にうなされ、寝返りを打ち、叫び声を上げたので、翌朝叔母から寝られなかったと文句を言われる。暗いうちから野良仕事に出ていたのか、朝早く叔父（叔母は独身なので夫婦ではなく、この叔父は少年の父か母の別の兄弟）が村から帰ってくる。学校で起きたことはすでに村人の間で噂になっており、その噂を聞いた叔父が、鉛筆をなくしただけでステパンがひどく折檻されたこと、気を失っても殴り続けられたために身動きもできないほどに衰弱して寝込んでいることなどを叔母に話し、教師について憤慨する。その話が終わらないうちに、少年は泣き出してしまう。叔父が彼を問い詰めると、彼は全てを打ち明ける。叔父はすぐに件の鉛筆を持って出ていく。(おそらくステパンの家に返しに行ったと推測される。) 少年は学校に行くよう叔母に促され、家を出る。学校への途上いまだ涙が止めどなく溢れてくるが、気持ちは遥かに軽くなっている。その日、ステパンは学校に来なかったし、二週間ずっと病欠だった。少年は罪悪感からステパンに再会するのを恐怖するが、学校に戻ってきたステパンは二人の間に何事も無かったかのように彼に対して以前と同様明るく親切に接してくる。ステパンは少年が鉛筆を持っていたこと、自分の受難に対して責任があったことを知っていたのか、知らなかったのか、それはわからないままである。とにかく、それ以降彼らは一度もあの鉛筆の件を話題にしなかった。

II. 当時のガリチアにおける教育の状況

まずは当時のガリチアにおける教育の状況をざっと見ておきたい。[12] その知識なくして、フランコの作品を正当に評価することは不可能である。

オーストリア帝国全土で6歳から12歳までの男女に対する初等教育が義務化されたのは、マリア・テレジア治世下の1775年であり、ガリチアおよびブコヴィナがオーストリア帝国に編入された第一次ポーランド分割（1772年）からおよそ3年後のことであった。この一般教育条例によって「各地に小学校を創設し、帝国内のすべての言語で教科書を印刷させた」[13] という。したがって、いわゆるガリチア地方における初等義務教育制度は、ここで扱う短編群が書かれた頃には既に100年の歴史を経ていたことになるが、現実には、この頃になっても義務教育は完全には浸透せず、特にガリチアやブコヴィナといった貧しい後進地域での就学率や識字率の低さは著しいものであった。[14]

一般教育条例が布告されても、まだ後代の義務教育のような強制力をもたなかったようである。児童労働が当たり前の時代に、子どもを学校へ送ることを拒否する親も多く、それはガリチアやブコヴィナに限った話ではなく、帝国各地で程度の差こそあれ広く見られたことであった。[15] 1868年に州の教育委員会が設置されるまでは、小学校の設立は地域に委ねられ、国家からの財政的な援助はなく、基金の拠出は自治体

または（Pfarrerschule の場合）教区によって担われた。[16] 財政的な問題のため、あるいは教師不足のため、閉校に追い込まれるケースも多かった。[17]「8 年間の義務教育は、オーストリアの大半の地域では 1869 年に導入された。ガリチアではそれは、1873 年に導入された。」[18]というように、帝国内他地域に比べ、ガリチアは（そしてブコヴィナは更に）後進的な地域であったが、この 8 年間という義務教育期間も 1885 年にはガリチア州では 6 年間に短縮された。[19] 当時は 2 年で 1 学年という計算であったため、これは 3 学年の義務教育ということになる。[20] 中等教育に進むためには 4 学年の初等教育を修了していることが必須であったが、3 学年までの学校を終えた後、予備コースに通い、欠けた分を補うことが可能であった。しかし、ここで注目しておきたいことは、ポーランド人の学校が通常 2−3 学年から成っていたのに対して、大半の住民がウクライナ人である農村部では、1 学年しか無い学校がほとんどであったという点である。[21]

ガリチアはそもそもポーランド分割によってオーストリアに組み込まれたことから、支配階級たる領主層はポーランド人貴族（シュラフタ）、または長い歴史的経緯によりポーランド化したウクライナ人貴族であり、都市部の住民の大半がポーランド人（およびユダヤ人）であった。当時のオーストリアの人口統計では、民族は日常使用言語によって分けられたので、たとえ起源がウクライナ人であっても、ポーランド化して日常ポーランド語を話していた領主層はポーランド人とみなされたのであるが、その大半は宗教的にもすでにローマ・カトリックに改宗していた。一方で、農村部はウクライナ人の世界であり、ウクライナ語のガリチア方言が話され、宗教的にはウクライナ・ギリシャ・カトリック（いわゆるユニエイト）であった。ポーランド分割により国を失ったポーランド人の恨みを宥めるために、ポーランド人支配層の既得権はオーストリア統治下でも温存され、ポーランド人の優位は崩れなかった。州議会を掌握し、州の教育行政を牛耳っていたのはポーランド人シュラフタ階級であり、彼らはウクライナ人農民を無知にとどめておくことを父祖伝来の政治的方針としていた。[22]

Ann Sirka（1980）や John-Paul Himka（1988）はポーランド人学校とウクライナ人学校の間の格差を、さまざまな統計資料を用いて明らかにしているが、その際、一つの重大な問題は授業言語が何かという言語権に関わる問題であった。というのも、ポーランド人学校でポーランド語が授業言語であるのは当然として、Sirka によれば、いわゆるウクライナ人学校でも、ポーランド語が授業の中でかなり併用され、ポーランド語を学ぶことに多くの時間が費やされた。[23] これはいわゆる「ポーランド化」政策（＝同化政策）の一環ということもあろうが、先ほど述べたウクライナ人生徒の中等教育への進学が非常に妨げられていた状況とも関係していた。三年間の初等教育の後、予備コース――予備コース終了後、教員養成校へは自動的に入学できた――を受験することになるが、合格判定の際ウクライナ人とユダヤ人に対しては明らかに差別があり、ポーランド人の合格率が異常に高かった。[24]

言語の問題は、教師による体罰にも繋がっていた。ウクライナ人の農村の小学校では、ウクライナ語を話したというだけの理由で教師から平手打ちを食らうようなことは日常茶飯事であった。[25] そこには、州政府当局が取ったポーランド化の方針が色濃く影響していたであろう。[26]

Ⅲ. 有島武郎『一房の葡萄』(1920) およびヘルマン・ヘッセ『クジャクヤママユ』(1911) との比較

筆者がフランコの『鉛筆』を初めて読んだとき、まず有島武夫 (1878－1923) の『一房の葡萄』(1920) を想起した。どちらの作品でも文房具が重要な役割を演じているということもあるし、フランコの主人公が鉛筆に対して感じるほとんどフェティッシュのような魅力は、『一房の葡萄』の主人公が級友の絵具に対して感じる欲望を思い起こさせずにはいない。

> ふと僕は学校の友達の持つてゐる西洋絵具を思ひ出しました。その友達は矢張西洋人で、しかも僕より二つ位齢が上でしたから、身長は見上げるやうに大きい子でした。ジムといふその子の持つている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種の絵具が、小さな墨のやうに四角な形にかためられて、二列にならんでゐました。どの色も美しかつたが、とりわけて藍と洋紅とは喫驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高いくせに、絵はずつと下手でした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さへなんだか見ちがへるやうに美しくなるのです。僕はいつでもそれを羨しいと思つてゐました。あんな絵具さへあれば、僕だつて、海の景色を本当に海に見えるように描いて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考へました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくつてほしくつてたまらなくなりましたけれども僕はなんだか臆病になつて、パパにもママにも買つて下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思ひつゞけるばかりで幾日か日がたちました。[27]

盗みのモチーフも共通している。『鉛筆』の主人公の場合は積極的に盗んだわけではないが、それが誰かの所有物であること、また、貧しい村の生徒にとって貴重な品物であることをよくわかっていながらカバンの中に隠し持っていたことには、やはり後ろ暗さが付き纏う。級友がそのために窮地に陥った時に沈黙していたことこそ最大の罪と言えるが、その前に、密かに着服しようとしていた時点で、既に彼は罪を犯しているのである。また、この盗みのモチーフは、(学校を舞台にした小説とは言えないが) ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse, 1877－1962) の『クジャクヤママユ (Das Nachtpfauenauge)』(1911) をも想起させる。[28] ヘッセの作品では、文房具ではなく、蛾の標本がフェティッシュとなっているのであるが。

この三作品を並べて比較すると、発端は似ているのであるが、後の展開は三者三様であることに気づく。『鉛筆』と『一房の葡萄』とでは教師像、また、『鉛筆』と『クジャクヤママユ』とでは事件後の友人との関係に著しい違いが見られる。『クジャクヤママユ』では『鉛筆』と同様、主人公が抱える問題の解決のために家族の介入が重要な役割を果たしているが、『一房の葡萄』では家族は登場せず、介入するのは教師である。また、『クジャクヤママユ』では（隣家の少年エーミールの父親が教師であることには触れられているが）教師は登場すらしない。似た題材を扱いながらも、3 つの作品は異なっている。そのような違いは、それぞれの作品が書かれた地域と状況の違いを反映していて、教育が象徴する近代化の様相が異なっていることに由来するのだと思われる。

『一房の葡萄』に描かれた学校はジムという外国人も通っているような横浜の私立学校であり、「教師は西洋人ばかりでした」[29] とある。すなわち、登場する「若い女の先生」[30] も西洋人ということになる（「真白なリンネルの着物につゝまれた体」[31]、「大理石のやうな白い美しい手」[32]）。作品の時代設定はいつ頃であろうか。有島の少年期の経験を反映しているのだとすれば、モデルとなった学校は容易に推測がつく。官僚であった有島の父は、将来のために英語や西洋文化を身につけさせたかったのであろうが、幼い武郎を外国人の家庭でしばらく生活させた後、横浜英和学校（現横浜英和学院）に入学させたのであった。

> 父は然しこれからの人間は外国人を相手にするのであるから外国語の必要が有ると云ふので、私は六つ七つの時から外国人と一所に居て、学校も外国人の学校に入つた。それが為に小学校に入つた時には、日本の方が遅れてゐるので、速成の学校に通つた。[33]

横浜英和学院のホームページには、「1880 年、アメリカのブリテン女性宣教師によって創立された本校は創立以来、今日まで一貫してキリスト教を基盤とした人間教育に徹してきました」[34] とあり、その沿革についての記述を見ると、

> 1880 年（明治 13 年）、本校はキリスト教学校として山手の居留地に、創立者の名を冠して「ブリテン女学校」として創立されました。最初はたった 4 名の生徒から始められました。
>
> 女性への教育と自立を目指して開校され、1886 年（明治 19）には校名を「横浜英和女学校」と改めました。[35]

とある。さらに、現横浜英和学院に付属の横浜英和小学校のホームページには、

（…）日本の子どもたちの教育のために，ブリテン先生によって，山手 48 番にブリテン女学校が創立されました。創立から 4 年後には，文豪有島武郎が入学し，代表作「一房の葡萄」は，当時の思い出を綴ったものです。[36]

とあるので、有島がこの学校に入学したのは 1884 年ということになる。ホームページの記述によれば最初から「女学校」として設立されたようだが、初期には共学だったのだろう。1871 年に文部省が創設され、1872 年に学制が公布されてからまだそれほど時は経ってはおらず、1890 年、1900 年の小学校令改正以前の、いまだ義務教育制度が確立されたとは言い難い時期であった。校長のハリエット・ブリテン（1822－1897）は、1884 年には 62 歳頃であるから、「若い女の先生」のモデルはおそらく別にいたはずである。インターネットで検索すると、横浜英和学院の学校案内パンフレットと思しきものの PDF が見つかり、そこには、「卒業生であった有島武郎が『一房の葡萄』で描いたのは、ブラウンと同時期に在職したミス・クリテンデンがモデルといわれています」[37] という記述が見られるが、残念ながらそのページだけを抜き取った写真ファイルであり、この資料についての詳細がまったくわからず、更にウェブ検索を続けても、このミス・クリテンデンすなわち若い女の先生のモデルという説が人口に膾炙しているらしきことはわかったものの、その根拠はわからずじまいであった。

それはともかく、1880 年代というのは、国を挙げて欧化政策が推進された欧化主義の時代であった。明治初期には欧米の宣教団体が数多くの学校を創設したが、日本の近代化に貢献する存在として一般に肯定的に受け取られていたものと推測される。[38]

近代化とそれによる日本の国際的地位の向上という至上命題の下に、学校教育制度の確立を急ぐ当時の日本において、その制度を否定的に捉えたり、それに対して疑問を呈したりしている余地は無かった。『一房の葡萄』に描かれる教師像はひたすら理想化され、葡萄を載せた「大理石のような白い美しい手」という詩的形象へと収斂し、あたかも神々しいオーラを帯びるが如くである。西洋人は残忍な支配者ではなく、未熟な日本人の子供を教え導いてくれる成熟した存在として描かれている。これはこれで一種の啓蒙的態度を含んでいるにせよ、とどのつまりは宣教会寄りのプロパガンダではないだろうか。

しかし、フランコの『鉛筆』に描かれる教師像との落差ときたらどうだろう！『鉛筆』の教師は、当時のガリチアの多くの村の学校でそうであったようにポーランド人、すなわち、異民族の教師であった可能性が高い。フランコは学校現場の現実を忠実に写し取っているのだと思われる。恐るべき教師像が容赦なく描かれるが、そこにはガリチアの酷薄な支配関係が垣間見える。そこには、啓蒙的プロパガンダという側面は当然あるが、その啓蒙の方向性や質が『一房の葡萄』の場合とは全く異なっているわけだ。

イヴァン・フランコは 1856 年、今日のウクライナのリヴィウ州ドロホービチ地区

ナフイェーヴィチー村で生まれた。鍛冶屋を営むフランコの生家は村では比較的裕福であったとはいえ、彼は両親を早くに亡くし、親戚の援助を受けつつ苦労して高い教育を受けた。1864年にヤセニーツァ村の小学校を出た後はドロホービチという町の聖バジリウス会修道院附属学校に通い、1867年にはドロホービチのドイツ語実科学校（Realschule）に進んだが、ドイツ語で授業が行われたこの学校にわざわざ通ったのは、ウクライナ語で高い教育を受けることがいまだ困難な時代であったためだろう。なお、この学校でのクラスメートにはユダヤ人が多かったようである。[39]（オーストリア帝国の人口統計では民族は日常使用言語によって分けられていたので、統計上は明白ではないが、宗教をユダヤ教としていた者の数からユダヤ人のおおよその数は知られ、その多くはポーランド語話者であったが、ドイツ語やウクライナ語を日常使用言語に選択する者もいた。）1875年、実科学校卒業後、リヴィウ大学に進むが、政治活動に加わるようになり1877年、80年と二度も逮捕された結果、退学処分となった。[40]（当時のリヴィウ大学は、もっぱらガリチアの支配者ポーランド人の大学であったと言ってもよく、社会主義者にしてウクライナ民族主義者でもあったフランコは大学当局にとって二重の意味で危険人物であったはずである。）大学時代から詩や小説作品を雑誌に発表したり、出版したり、親友パヴリクと共に雑誌を発行したりした。彼の学業は長く中断されることとなるが、新聞・雑誌への寄稿、翻訳、詩や小説作品集の上梓など、執筆活動は盛んになっていった。1889年には3度目の逮捕を経験する。1891年に一時チェルニフツィ大学に在籍して博士論文の作成に取り掛かるが、まもなく断念し、結局1893年にウィーン大学で博士号を取得することとなった。精力的に文学上の仕事をこなしてはいたが、決して裕福になれたわけではなく、1902年には彼の暮らし振りがあまりに貧しいので友人たちが憐れみ、寄付金を募って、リヴィウ市内に一軒の瀟洒な邸宅をプレゼントしたという逸話があるくらいである。[41] 晩年の9年間は関節のリューマチに苦しみ、右手が麻痺してしまったため、ほとんど執筆活動が絶えた。

当時のウクライナ人としては教育の機会に恵まれ、その恩恵を被ったはずのフランコだが、しかしその人生の道のりは決して楽なものではなかった。『幼いミロン』(1885)の最後の部分で、フランコは自身の未来を予見していたかのような言葉を遺している。

> ミロンはどうなってしまうのだろう？このような蕾からどのような花が咲くのだろう？予想することは難しくない。このようなタイプの子どもは我々の村々にはよくいる。幼くしてすでに、歩き方、外見、言葉、行為において他人と違っている。そして、そのような子どもが、教育を受ける機会がまったくなくて、込み合って狭苦しい農家の小屋で日を送ることを強いられるなら、また、彼が他の人々に似ていないことを両親が始終彼に思い起こさせるなら、そうしたことはみな、その子の個性や生まれつきの能力を押し殺してしまいがちである。そうすると、個性や能力は

ずっと使われないままに退化し、そんな風に、我々の幼きミロンを無能な百姓、貧しい田舎者へと堕落させる。あるいは、もっと悪いことに、彼の才能を様々な建設的な仕事の方に向かわせる能力を彼から奪ってしまい、それによって彼が悪の道へと迷い込み、犯罪者か山師となる危険を増すのである。もし、一方で、たまたまそのような子どもの両親が愛情豊かで、貧乏過ぎはせず、僅かの財産を彼の教育のために捧げるとしたら、その場合はいったいどうなるだろうか？そのような子どもの運命はより良きものに、つまり、言葉の普通の意味でより良きものになるだろうか？全然違う。学校で、彼は旺盛に知識を追い求め、病人が新鮮な空気を吸い込むように知識を吸収し、卒業するやすぐさま、無知蒙昧の踏みつけられた人々に熱心に知識と高い理想を広めるだろう…。しかし、その見返りに彼を待ち受けているのは、まったく羨ましくない運命だ――彼は監獄の壁と親しみ、同胞からあらゆる種類の侮辱の言葉を受け、どこかわびしい土地で貧苦に喘ぎながら、友もなく、孤独に暮らすことになる。あるいは、監獄から釈放されても、致命的な病の病原菌に冒されていて早くに墓場に行くことになる。あるいは、聖なる絶対の真理に対する信仰を失ってしまい、憂さを忘れ去ろうとすっかり酒に溺れるようになる。可哀そうな幼きミロン！[42]

さて、ヘッセの『クジャクヤママユ』について、短く触れておこう。このヘッセの短編では学校は後景に退いていて、直接には出てこない。しかし、クジャクヤママユの標本の所有者である隣家のエーミールは、「模範少年（Musterknabe）」[43] あるいは「理想的少年（Idealknabe）」[44] ということになっていて、主人公の少年と対比的に描かれる。『車輪の下（Unterm Rad）』（1906）その他のヘッセの主人公たちは、みな、繊細で感受性が強いために社会にうまく適応できないような、学校でも常に窮屈な思いをしているような青少年たちである。問題は学校教育批判というような形で展開されるよりはむしろ、個人対社会の葛藤として描かれる。ヘッセの視点はやはり、代々牧師や宣教師を輩出したインテリの家系に生まれた、繊細で夢見がちな文学青年のそれである。うまく社会に適応していけるエーミールの方が正しいと認めざるを得ないが、どうしてもそれに対する反感を拭い去ることができない。この苦い思いの質は、『鉛筆』の主人公が感じる苦さとは大きく異なっている。何に対して罪責の念を感じているのかに、根本的な違いがあるように思われる。『クジャクヤママユ』の主人公は、甘美な誘惑に負けて窃盗の罪を犯したことを恥じてはいても、エーミール個人に対して罪悪感を抱いているかどうかは怪しい。そもそも未遂の窃盗であり、彼の罪はむしろ、クジャクヤママユの標本を破損してしまうことの方にあると言ってよい。その際、他人の持ち物を盗もうとして破損したことに対する罪悪感以上に、クジャクヤママユの標本の美が損なわれてしまったことに対して心の痛みを感じている。

自分がこわしてしまった美しい珍しい動物 （＝クジャクヤママユ） の光景が、いまや、ほとんど、盗みを犯してしまったという気持ち以上に僕を苦しめた。[45)]

社会的ルールを犯したことは償われなければならない罪責であるとしても、誘惑に屈することは避けがたく、堕罪に伴う苦い幻滅は、己を見出し、己になるために誰しもが必然的に通過しなければならない道程であるかのようだ。聖書の失楽園の物語の変奏として読むこともできそうである。社会のシステムに何の疑いも持たずにすんなり適応していくことより、失敗を犯し、たとえ無様ではあっても、生の罪を引き受けつつ、傷を負いながら成長していくことこそ真実だというメッセージが潜んでいるのではないだろうか。いまだ世紀末の唯美主義や象徴主義の延長線上にあるような（美の象徴としてのヤママユガの標本をめぐる）作品だが、ここにはすでに後のヘッセの諸作品に繋がっていく、実存的なテーマが潜んでいる。

有島の場合もヘッセの場合も、フランコとはまるで違う境遇で育ったのであり、異なる社会的文脈の中に生きていた。世代的にも、有島とヘッセがほぼ同時期に生まれたのに対して、フランコは 20 年ほど前に生まれていたわけであるし、時代の違いや執筆時の年齢の違いなども考慮に入れるべきかもしれない。同じような題材を扱いながらも、当然ながらそのメッセージ性は異なっている。三者の比較において浮かび上がってくるフランコの作品の特色は、貧しい同胞への共感であり、民族差別の横行する不条理な社会への怒りである。

Ⅳ.『フリーツの学校教育』(1879)、『ペン習字（*Schönschreiben*）』(1879)

1)『フリーツの学校教育』

『ガリチア素描』に収められたフランコの他の二つの短編『フリーツの学校教育』、『ペン習字』（タイトルだけドイツ語で Schönschreiben となっている）では、やはり教師の暴力が克明に描かれる一方で、彼らの教育方法のお粗末さが皮肉られる。

『フリーツの学校教育』の冒頭では、幼いフリーツが農場でガチョウの番をしている牧歌的情景が描かれる。ガチョウたちを追い立て、時には杖で激しく打擲するフリーツは、この小世界の主人として振舞っている。この時フリーツもガチョウも何も予感していなかったのだが、父親はフリーツを学校に入れることに決めていた。突然父に呼ばれたフリーツは、身支度を整えられ、学校に連れていかれる。学校でまずフリーツが経験するのは、他の子供たちからのいじめである。

彼らは廊下に入っていったが、そこはひどく暗く、腐ったキャベツの強烈な臭いがした。

「あそこ、見えるか？」一人の少年がフリーツに言い、暗い隅を指し示した。

「見えるよ。」と、全然何も見えなかったにもかかわらず、フリーツは震えながら言った。

「あそこが穴倉さ。」と少年は言った。

「穴だ！」とフリーツは反復した。

「お前が勤勉でなければ、先生がお前をこの穴倉に押し込めて、そうしたらお前は一晩中そこに座っていなけりゃならないんだ。」

「そんなの嫌だよ！」とフリーツは悲鳴を上げた。

その間に、別の少年が最初の少年の耳元に何事か囁き、二人は笑いだした。

それから、最初の少年が教室のドアを指し示し、フリーツに言った。

「そこをノックしてみな！早く！」

「どうして？」フリーツは尋ねた。

「そうしなきゃならんのさ！ここじゃあ、新入生は、そうするのがしきたりなんだ！」

教室の中は蜂の巣をつついたように騒がしかったが、フリーツが拳でドアを叩くと、しーんと静まりかえった。例の少年たちがドアを少し開け、フリーツを中に押し込んだ。

その瞬間に、むち打ちが彼の背中に雨霰と注がれた。

フリーツは恐怖のあまり、大声で喚き始めた。

「静かにしろ、馬鹿！」といたずらっ子たちはフリーツに向かって叫んだ。彼らは、ノックの音を聞くと、ドアの後に隠れて、フリーツにこの悪戯を仕掛けたのであった。

「あう、あう、あう、あう！」とフリーツは喚いた。少年たちは、教師に聞かれてはまずいので驚愕し、彼をなだめようとした。

「静かにしろ、馬鹿！これでいいんだ！ドアをノックする奴は、背中を殴られなきゃならんのだ。知らなかったのかい？」

「し…知らなかった！」と、フリーツは嗚咽を堪えながら答えた。[46)]

さらにいじめっ子たちはフリーツをからかって、御馳走だと嘘をついてチョークを食べさせる。しかし、彼を待ち受けている過酷な試練はこれに留まるものではなく、恐るべき授業が待っている。

「おい、フリーツ君よ、君は全然注意していないな！」と教師は彼を怒鳴りつけ、涙が出そうなほど強く彼の耳を引っ張った。彼はまったく驚愕してしまって、しばらく見ることも聞くこともできないほどだった。ようやく気を取り直すと、生徒たちは既に、教師が開いたり閉じたりする調節パネルに従って、綴り方を学んでいるところだった。彼らは歌うような抑揚で、「ア・バ・バ・ハ・ラ・マ・ハ」

と倦むことなく、絶えず繰り返していた。奇妙なことに、これがフリーツにはとても楽しかったので、彼は金切り声で他の生徒らと競うように「ア・バ・バ・ハ・ラ・マ・ハ」と叫んだ。教師は早くも彼を勤勉で賢い生徒として誉めようとかと思った。しかし、念のために、彼は文字の位置をずらした。まったく思いがけないことに、彼は少年たちに「ババ」を見せたのだが、そちらの方を見ずに教師ばかり見つめていたフリーツは、歌うような声で、「ハラマハ」と叫んだ。皆が笑い、教師も笑った。ただフリーツだけが、びっくりしてキョロキョロ辺りを見回し、大きな声で隣の生徒に「君はどうしてハラマハと言わないの？」と言った。教師の鞭を背中に感じたとき、哀れなフリーツはようやく現実に引き戻された…。[47]

このような教え方でアルファベットを呪文のように唱えさせられることが一年も続いても、フリーツは一向に進歩しなかった。

この重要な日から、ちょうど一年が過ぎた。息子の将来に対する父の輝かしい希望は、とっくの昔に消え去っていた。教師は彼に面と向かって、フリーツは度し難く馬鹿だから、家に連れ帰って鷲鳥の番をさせておいた方がよいと言ったのであった。そして本当に、学年の終わりになっても、フリーツの知識は一年前とまったく変わらなかった。確かに、「ア、ババ、ハラマハ」はすっかりそらんじていたし、眠っている間にも、この奇妙な語の構成は何度も彼の口から漏れ出た。それはいわばあらゆる学識の基礎であったが、そこから先へ進むことは彼には定められていなかった。それ以上フリーツは学びはしなかった。文字を彼はいつも取り違えて、目の前の文字がシャー（Ш）なのかテー（T）なのか、エル（Л）なのかエム（M）なのか区別できなかった。「読み方」については言うまでもない。その原因が彼の理解力の欠如にあるのか、教師の無能にあるのかは、今は問うまい。いずれにせよ、この年の生徒たちの間では、フリーツ以外にも、30 人中 18 人がまったく同じように「度し難く馬鹿」だった。彼らは皆、その学年の間中、毎日繰り返される鞭打ち、びんた、蹴り、はたき、永遠に続くかのような髪の引っ張りから解放されて、再び完全な栄光に輝いて牧場に現れることができたなら、どんなに素晴らしかろうとばかり考えていた。

フリーツはもちろん最も強く、最も頻繁にそのことを考えた。一年に及ぶ学問のさまざまな問題との必死の格闘の末にボロボロになってしまったあの忌々しい初級読本、あの忌まわしい「ア、ババ、ハラマハ」、あの忌まわしい教師のしつこさ、その永遠に続くかのような学問の宣伝には、彼はもううんざりしており、すっかり痩せてしまい、顔色も悪くなり、影のように静かにうろつきまわっていた。とうとう神様が憐れんでくださって、7 月を送ってくださった。父親も憐れんで、ある朝、彼にこう言った。

「フリーツ！」
「は？」とフリーツは言った。
「今日からはもう学校に行くな。」
「うん。」とフリーツは言った。
「ブーツと帽子とベルトを脱ぐんだ。日曜日のために仕舞っとかにゃ。お前はまた縄を持って、古い帽子を被って、鶯鳥の番をしに行っていいぞ。」
「うん！」とフリーツは嬉しそうに答えた。[48)]

物語の最後には、フリーツの帰還による「喜ばしい」変化が差し迫っていることを馬鹿なガチョウたちが予感すらしていないこと、フリーツの不在の間はルーチュカという名の近所の少年がガチョウたちの番をしていたことなどが語られる。この少年は、フリーツとは違い、牧場で泥遊びをして転げまわっているばかりだ。

ガチョウは周知のとおり愚かな生き物である。今回も、彼らは差し迫った喜ばしい変化について、何も気づいてはいなかった。フリーツが学校に通っていた一年の間、ルーチュカという名の近所の幼い少年が彼らの番をしていたが、この子の牧場での活動は、通常、いくつも穴を掘って、湿った土塊で饅頭を作ったり、地面を転げまわったりすることだった。ガチョウのことなど、まったく構いはしなかったので、彼らは監督されずにあちこちほっつき歩いていた。時に彼らは耕地に侵入したが、そうすると畑の所有者の農夫に大いに罵られ、杖でしたたかに打ちつけられることさえあった。[49)]

このフリーツの不在の間の様子の報告とそれに続くガチョウたちの受難の話（これはこの後もう少し長く続く）は、一見したところ、脱線あるいは無駄な付け足しのようにも見えるが、けっしてそうではない。冒頭部で牧場の支配者として、時にはガチョウを杖で打擲するフリッツの姿が描かれ、やがて、学校では逆に教師という支配者に鞭で打たれる彼の姿が描かれた。牧場でのフリーツは監督の仕事をきちんとこなしていたのだが、教師はと言えば気まぐれな暴君であり、その仕事ぶりが有意義なものかどうかは甚だ疑問である。言ってみれば、この教師の姿は、フリーツよりもむしろ幼いルーチュカに重なるのである。憐れなガチョウたちの姿は、学校の生徒たちの姿と重なるが、また、無知な存在に留まらされている民衆そのものの寓意でもある。このように、フランコは農民になじみ深く理解しやすい隠喩を巧みに使いながら、この物語を構成している。[50)]

2)『ペン習字（Schönschreiben）』
杖による打擲は別の短編『ペン習字』にも現れる。『フリーツの学校教育』では読み

方の授業が描かれているが、『ペン習字』では書き方の授業が取り上げられる。主人公の名前は『幼いミロン』の場合と同じくミロンであるが、この名はフランコが幼少時に呼ばれていた別名であり（これは、いわゆる避諱の習慣がガリチア地方にもあったことを意味する）、また、彼のペンネームのひとつでもあった。[51] 舞台となっているのは子供時代にフランコが通ったドロホービチの聖バジリウス会修道院付属学校である。タイトルがわざわざドイツ語になっているのを見ても、この学校ではドイツ語で授業が行われていたようである。（フランコはドロホービチのドイツ語実家学校に進むための準備として、ドイツ語を学ぶためにここに通ったのであろう。）ここでもやはり恐るべき教師が描かれる。ペン習字の授業を担当しているヴァリコ先生（пан Валько）である。名前から判断すると、この教師はおそらくポーランド人である。（ちなみにWeirによる英訳ではWalkoとなっている[52]）。

> バシリウス会の修道士たちが経営するドロホービチの学校の第二学年の教室は、静まり返っていた。「ペン習字」の時間、すなわち、教科の故にというよりむしろ教師の故に皆にとって恐怖の的となっていた時間が近づいていた。バシリウス会の学校では、修道士たち自身が全教科を教えていたが、作文の授業だけは俗人の教師、すなわち以前の経営者だか校長だかであったヴァリコ先生を雇っていた。ヴァリコ先生自身は明らかに、自分がまだ経営者であるかのように思っていた。流石に今は鞭をもって歩き回るのはやめたが、杖までは避けず、それを活用することを怠りはしなかった。もちろん、子どもたちは、ほんの一時間でもそのような教師の掌中に委ねられれば、震えあがったのであり、「ペン習字の時間」は彼らにとっては大いなる責め苦であった。[53]

ミロンは村の学校で学んだ後、この学校の第二学年に編入されてきたばかりで、この教師の授業を受けるのは初めてであった。教師の教え方は、ただ黒板に見本を書いて、生徒たちに書き写させるだけだが、机間を巡回して生徒の仕事を監視し、下手な者は杖でしたたかに殴る。そればかりか、最後列に座っている粗暴な生徒たちに命じて、出来の悪い生徒を袋叩きにさせる。恐怖で手が震えて上手に書き取りができない生徒も、左から右へ文字を書くことに慣れていないユダヤ人の生徒も、散々な目に合う。ヴァリコはユダヤ人に対してあからさまに差別的で、彼にとってユダヤ人の生徒はすべて「モイシェ（＝モーゼ）」である。（しかし、金持ちのユダヤ人の子には特別扱いをする。）そして、この残忍な教師の目は、とうとうミロンの上に留まる。ミロンはペンの持ち方をヴァリコになじられ、したたかに殴られて気を失ったうえに、例の最後列の生徒たちの餌食となる。血だらけになって床に倒れているミロンを見て、ヴァリコは一瞬やりすぎたと感じるが、ミロンが農民の息子だと知ると、まったく問題にはならないと考え安堵する。実際、この件について誰も問題にしはしないが、ミロンの

心に深い傷を残し、抑圧および専制に対する憤りと軽蔑と永遠の憎悪を植え付ける。

この項では『ガリチア素描』に収められた二つの短編の概略を述べたが、これ以上多言を弄さずともフランコの意図は明白であろう。当初ミロンというペンネームで雑誌に発表されたこれらの作品[54]は、フランコ自身の自伝的経験が色濃く反映され、当時、支配階級のポーランド人から教育を受ける権利や言語権を著しく阻害されていた同胞への深い同情と、社会の歪んだ構造に対する義憤とに満ちている。しかし、単なる告発に終わってしまうのではなく、広く社会に問題を知らしめ、改善をもたらすことこそが目指されている。その際、ポーランド人に対する個人的恨みに拘泥するのではなく、『ペン習字』を締めくくる「抑圧および専制に対する憤りと軽蔑と永遠の憎悪」という表現に見られるように、一般的な社会正義こそが希求されている。彼の作品には多分にジャーナリスティックな姿勢がうかがわれ、民衆教化的であると同時に、オーストリア帝国の中央政府に対するアピールを含んでもいるのだと考えられる。[55] ジャーナリズム的性格、ウィットに富んだ風刺、文学的な技巧と構成力が綯い交ぜになって、彼の作品の独特の魅力を生み出しており、けっして単なる思想作家、民族作家で片づけられるものではない。が、ややもすると、その政治性が鼻につくこともある。とは言え、彼の文学活動が行われた時代的・地域的背景を深く知れば、それが如何に酷薄な現実との真剣勝負の中で生み出されたものであるかが看取され、感動を覚えずにはいられない。

V. 結

イヴァン・フランコの『ガリチア素描』に収められた学校教育に関わる短編群を見直したうえで、結論として言えることは、ガリチアの切実な状況の中で、啓蒙の人フランコこそ民衆の偉大な教育者であったということだ。

フランコの『鉛筆』を英訳で初めて読んだとき、まずはその暴力描写の凄まじさに仰天した。またその際、有島の『一房の葡萄』とヘッセの『クジャクヤママユ』のことがすぐに念頭に浮かびはしたが、似ていると感じると同時に、その違いになんとも合点がいかず、いったいこの違いは何なのかと割り切れぬ思いを覚えた。今回の論考は、自分なりに、この疑問に対する答えを提出しようと試みたものである。イヴァン・フランコの没後百年を記念する本年に、以前からずっと気に掛かっていたこのテーマを取り上げ、このような形にまとめ上げられたことは格別の喜びである。

註

N. B.: 日本語、ウクライナ語、ドイツ語、英語、ロシア語の資料のそれぞれについて、書誌情報は、その資料について最初に言及する際はそれぞれの言語で記載することとした。したがって、ページを示す記号は、「p.」、「S.」、「c.」が混在している。二度目以降の言及では、原則として、名前以外は日本語で表記した。また、全集などに収められた短編小説のタイトルは、欧文表記の場合には下線を付して示すこととした。なお、本文中、外国語文献からの直接引用はすべて私訳である。

1) フランコの語学の才能はウクライナでは半ば伝説となっている。ドイツ語やポーランド語でも自身の作品や記事を書いたほか、ゲーテなどのドイツ文学作品のウクライナ語への翻訳の仕事も重要である。フランコの翻訳の仕事の量は膨大なものであった。フランコ生誕 160 年および没後 100 年記念行事についてウクライナ外務省のウェブサイトで広報されている（Міністерство закордонних справ України, "Ювілейні дати великого каменяра（偉大なる石工の記念祭）": http://mfa.gov.ua/en/news-feeds/foreign-offices-news/50400-juvilejni-dati-velikogo-kamenyara, 2016 年 10 月 12 日閲覧）が、そこには、「14 の言語に対する通暁暢達は、彼が 14 の言語および 37 か国の国民文学から約 200 人の著作家の作品をウクライナ語に翻訳することを可能にした。」とある。ちなみに、この広報記事のタイトルに見える「石工」というのはフランコの有名な詩『石工たち（Каменярі）』(1878) に由来する。人類の進歩のために苦闘する石工というイメージからは、フリーメイソンとの繋がりが想像させられるが、フランコがフリーメイソンであったという資料はまったく見当たらない。ソ連時代には、『石工たち』は革命的な詩と解釈され、石工のイメージ（つるはしを持ったイメージなので、石切り人夫とか砕石場労働者と訳した方が適当かもしれないが）は苦心して困難を克服して未来を切り開く労働者のそれとして革命のシンボルとなった。

2) ガリチアにおける雑誌の発行部数の推移などは、John-Paul Himka, *Galician Villagers and the Ukrainian National Movement in the Nineteenth Century* (New York: Macmillan 1988), pp. 66－80 を参照せよ。なお、昨年 11 月 28 日に早稲田大学で開催されたウクライナ研究会と早稲田大学ロシア研究所の合同シンポジウム「隣人から見たウクライナ――ロシア・ポーランド・オーストリアからの視座」（筆者はパネリストの一人として発表を行った）において、パネリストの発表後の質疑応答の際、ウクライナ文学がいつ成立したのかということが話題に上ったが、18 世紀末のイヴァン・コトリャレフスキー（Іван Петрович Котляревський, 1769－1838）の『エネイーダ（Енеїда）』(1798) がウクライナ語で書かれた最初の作品であること、その後 19 世紀にはタラス・シェフチェンコ（Тарас Григорович

Шевченко, 1814－1861）のウクライナ語による詩、ミコーラ・コストマーロフ（Микола Іванович Костомаров, 1817－1885）などのハリキウのロマン主義運動、マルキヤン・シャシュケーヴィチ（Маркіян Семенович Шашкевич, 1811－1843）らルテニア三人組（Руська трійця）による『ルサールカ・ドニストローヴァヤ（Русалка Дністровая）』（1837）などが存在したことは周知の事実である。（Ann Sirka は民衆語で出版された『ルサールカ・ドニストローヴァヤ』の出版が与えたインパクトの大きさを強調している［Ann Sirka, *Nationality Question in Austrian Education: The Case of Ukrainians in Galicia 1867-1914*, (Frankfurt am Main; Bern; Cirencester/UK: Peter Lang, 1980) p. 7］。）ただし、ウクライナ語による文学が一部のインテリ層の趣味や政治運動という範囲を超え、広く大衆の間に購読者層を獲得するに至ったのは 19 世紀後半以降のことであったと思われる。この時期には、ロシア帝国側のウクライナでも、ミハイロ・ドラホマーノウ（Михайло Петрович Драгоманов, 1841－1895）やレーシャ・ウクライーンカ（Леся Українка, 1871－1913）などのウクライナ語による執筆活動があったが、ロシアでは1863年のヴァルーエフ指令や1876年のエムス法によりウクライナ語による出版の道が閉ざされたので、キエフの文人たちもわざわざオーストリア領ガリチアで出版せざるを得なかった。そのため、ガリチアの州都リヴィウはウクライナ文学史上、非常に重要な役割を担うこととなった。ガリチアでウクライナ語による雑誌が刊行された歴史は 1848 年の革命期に遡るが、その後の反動でこの流れは一時滞り、再び次第に盛んになってきたのは 1860 年代末である。識字率の問題などもあったので、刊行される雑誌の数が増え、発行部数が大きく伸び、ウクライナ文学が大衆に浸透するに至るのは 1880 年代から第一次大戦に至るまでの時期と考えられるだろう。国民文学の成立がある程度の広い読者層の存在を条件とするものであるとすれば、真の意味でウクライナ文学が成立した時期は 19 世紀後半ということになるだろう。この遅れの背景には、ロシアでは 17 世紀末以来の長いロシア化の歴史の中で、文章語としてのウクライナ語やウクライナ語による文学の成立が阻害された歴史があり、ガリチアでは知識層たる貴族階級がポーランド化してしまったため、ウクライナ語が野卑な民衆語として長く軽蔑の対象となっていたという事情がある。

3) これについては、Himka, 同上, pp. 59－66 を参照。

4) 初出は雑誌 *Правда* 1879 年第 12 号。

5) 1885 年の『ガリチア素描』への掲載が初出だが、1910 年刊行の作品集『額に汗して（*В поті чола*）』の解説には成立年として 1879 年と書かれている（Іван Франко, *В поті чола: вибір з оповідань* [Коломия: Вид. Філії т-ва "Учительська громада", 1910], c. v）。

6) 初出は雑誌 *Діло* 1883 年 4 月。

7) 初出は雑誌 *Зоря* 1884 年第 2 号だが、『額に汗して』には執筆年として 1879 年とある。

8) 小粥 良「ガリチアの首都レンベルク」山口大学『独仏文学』第 28 号、山口大学独仏文学研究会、平成 18 年 12 月、pp.75－107。

9) フランコの生涯については、ウェブサイト Encyclopedia of Ukraine（Canadian Institute of Ukrainian Studies が主催するウェブ百科事典）の「Ivan Frako」の項（http://www.encyclopediaofukraine.com/display.asp?linkpath=pages%5CF%5CR%5CFrankoIvan.htm [2016 年 9 月 30 日閲覧]）およびソ連時代に出版されたイヴァン・フランコ短編集の英訳（Yevhen Kirilyuk, "The Great Paver of the Way," translated by Anatole Bilenko, in Ivan Franko, *Stories*, compiled and introduced by Prof. Yevhen Kirilyuk, Kiev: Mistetstvo Publishers, 1972）の冒頭にあるイェヴヘン・キリリュークによる解説（pp. 7－18）を参照した。

10) 当時の長さの単位。1 ツァーリ（цаль）は 2.4 cm。

11) Іван Франко, Оловець, *Зібрання творів: у п'ятдесяти томах, т. 15: Повісті та оповідання (1878-1882)*, (Київ: Наукова думка, 1978), с.72.

12) この項の執筆にあたっては、主として Himka, 前掲書, pp. 59－66 および Ann Sirka, 前掲書, pp. 60－90 を参照した。

13) 増谷秀樹／古田善文『図説 オーストリアの歴史』河出書房新社、2011 年、p. 26。

14) Himka, 前掲書, pp. 63－5.

15) 同上, p. 65.

16) Sirka, 前掲書, p. 74.

17) Himka, 前掲書, p. 60.

18) 同上, p. 63.

19) 同上。

20) 同上。

21) Sirka, 前掲書, p. 28.

22) Himka, 前掲書, p. 61.

23) Sirka, 前掲書, p. 28.

24) 同上, pp. 86－7.

25) 同上, p. 81.

26) 同上, pp. 80－84.

27) 有島武郎「一房の葡萄」『有島武郎全集 第 6 巻』瀬沼茂樹他編、筑摩書房、1981 年、p. 120－1（漢字は新字体に改め、振り仮名は省略）。初出は雑誌『赤い鳥』大正 9 年（1920 年）8 月号、pp. 16-25。また、1922 年（波多野秋子との心中事件の前年）『一房の葡萄』という題名で叢文閣から刊行された創作童話集の巻頭に収録されている。

28) 1931 年の改稿では題名が「少年の日の思い出（*Jugendgedenken*）」に変えられている。この二つの稿の異同については、佐藤文彦「ヘッセ『少年の日の思い出』(1931)：『クジャクヤママユ』(1911)との異同をめぐって」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』第 6 号、金沢大学歴史言語文化学系、2014 年、pp. 41－53 に詳しい。

29) 有島「一房の葡萄」前掲書、p. 120。

30) 同上、p. 122。

31) 同上、p. 127。

32) 同上。

33) 有島武夫「私の父と母」『有島武郎全集 第 7 巻』、瀬沼茂樹他編、筑摩書房、1980 年、p. 189（漢字は新字体に改めた）。初出は『中央公論』大正 7（1918）年 2 月号。

34) 横浜英和学院ウェブサイト「TOP」。
URL: http://www.yokohama-eiwa.ac.jp/ （2016 年 9 月 30 日閲覧）

35) 横浜英和学院ウェブサイト「沿革」。
URL: http://www.yokohama-eiwa.ac.jp/contents/history.html （2016 年 9 月 30 日閲覧）

36) 横浜英和小学校ウェブサイト「校長メッセージ」。
URL: http://www.yokohama-eiwa.ac.jp/shougakkou/introduction/message.html (2016 年 9 月 30 日閲覧)

37) 詳細は不明だが、青山学院大学ソーパー・プログラムのウェブサイトに、横浜英和学院の「創立の礎」としてこの PDF ファイルが掲載されている。
URL: http://www.soper.kirisutokyo.jp/pdf/YokohamaEiwagakuen.pdf (2016 年 9 月 30 日閲覧)

38) 明治 20 年代になると、国粋主義が強まり、情勢は次第に変化していった。

39) Леонід Рудницький, *Іван Франко і німецька література*, друге уточнене і розширене видання (Львів: Наукове товариство імені Шевченка у Львові, 2003) の巻頭に「序言の代わりに」として掲載されている Іван Денисюк の „Фундаментальне дослідження вагомої проблеми“という文章によれば、ドロホービチのギムナジウム（としばしば呼ばれているが Realschule であったらしい）の上級生にはユダヤ人が多かったということである（c. 6－7）。

40) 前掲ウェブサイト Encyclopedia of Ukraine の「Ivan Franko」の項を参照（2016 年 9 月 30 日閲覧）。

41) リヴィウ市内のその家が今日、イヴァン・フランコ通り 150－152 番地のイヴァン・フランコ文学記念館（Львівський національний літературно-меморіальний музей Івана Франка）になっている。現在の館長は著名なイヴァン・フランコ研究者ロマン・ホーラクである。記念館のウェブサイト（http://dim-franka.lviv.ua/）

にフランコ住んでいた頃のまま保存されている館内の部屋部屋の写真が掲載されている。

42) Іван Франко, Малий Мирон, *Зібрання творів: у п'ятдесяти томах, т. 15: Повісті та оповідання (1878-1882)*, (Київ: Наукова думка, 1978), c.70－1.

43) Hermann Hesse, Das Nachtpfauenauge, in *Sämtliche Werke in 20 Bänden und einem Registerband, Bd. 8: Die Erzählungen 3. 1911－54*, hrsg. von Volker Michels, zweite Auflage (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003), S. 16.

44) 同上、p. 16.

45) 同上、p. 19.

46) Іван Франко, Грицева шкільна наука, *Зібрання творів: у п'ятдесяти томах, т. 16: Повісті та оповідання (1882-1887)*, (Київ: Наукова думка, 1978), c. 178－9.

47) 同上, pp. 180－1.

48) 同上, pp. 181－2.

49) 避諱の習慣によって用いられたフランコのミロンという幼名については、ソフィヤ・チェメリス（С.Чемерис）監督の『偉大なウクライナ人たち――イヴァン・フランコ（*Великі Українці — Іван Франко*）』（ТРК "Інтер", 2008）というドキュメンタリー映画で言及されており、それを典拠にウィキペディアの「Ivan Franko」の項（https://en.wikipedia.org/wiki/Ivan_Franko）でも言及されている。他の典拠を求めてウェブ検索した結果、ウクライナのロシア語タブロイド紙 *Факты и комментарии* の 2016 年 5 月 28 日付の興味深いインタビュー記事が見つかった。前述のリヴィウ国立イヴァン・フランコ文学記念館の研究副所長ミハイル・コブリンが、インタビュアーの「両親が幼いイヴァンをミロンと呼んでいたというのは本当ですか？」という質問に対して次のように答えている。「はい、当時は悪霊から子どもたちを守るために、洗礼時に与えられた名前では呼ばないという迷信がありました。（ところで、ミロンはフランコが後に使った幾つかのペンネームのうちのひとつとなりました。）」（http://fakty.ua/217365-ivan-franko-byl-lyubyacshim-otcom-dlya-svoih-chetveryh-detej-on-pisal-dlya-nih-skazki-vodil-v-les-za-gribami-bral-s-soboj-na-rybalku [2016 年 10 月 12 日閲覧]）

50) 動物を使った寓意は、やがて寓話詩『狐ミキータ（Лис Микита）』（1890）において見事に花開くこととなるが、ここではその萌芽が感じられる。ミキータの物語は、ゲーテの『ライネケ狐』と内容的にはほぼ変わらないが、盗作というよりも、中世から続くこの物語の系譜にフランコが見事なウクライナ語の韻文で新たな作品を付け加え、多民族国家オーストリア帝国のアレゴリーという新たな文脈を創出したと言える。この作品は、ウクライナでは誰もが知る名作として今も愛されている。

51) Іван Франко、前掲書、p. 182.

52) Ivan Franko, Penmanship, tr. by John Weir, In: *Ivan Franko: Poems and*

Stories, translated by John Weir (Toronto, Canada: Ukrainska Knyha, 1956), p. 189.

53) Іван Франко, Schönschreiben, *Зібрання творів: у п'ятдесяти томах, т. 15: Повісті та оповідання (1878-1882)*, (Київ: Наукова думка, 1978), с. 85.

54) この事実は、前掲の 50 巻全集（Іван Франко, *Зібрання творів: у п'ятдесяти томах*）の第 15 巻 p. 489 および第 16 巻 p. 486 にあるそれぞれの作品の解説に記載されている。

55) そのような意図は、特にウィーンの新聞（主として、*Die Zeit*）にドイツ語で寄稿された作品に顕著に表れている。これらは、まずウクライナ語で執筆し、本人がドイツ語に翻訳したものである。また、フランコがドイツ語で書いたルポルタージュ記事については、以前の拙稿（小粥 良「イヴァン・フランコの『Die Auswanderung der galizischen Bauern』（1892)」『山口大学 独仏文学』第 29 号、山口大学独仏文学研究会、2007 年、pp. 17－44）を参照されたい。